

旧伊深村役場(美濃加茂市伊深町)の意匠と技法

—近代地方公共建築の意匠に関する事例的考察—

溝口 正人

キーワード：洋風建築・庁舎・役場・伊深村・昭和・美濃加茂市

1. はじめに

文化財保護法に基づいて建造物の現存遺構を評価する場合の基準については、国の指定基準で明確に規定されている。周知の事項であるが確認すれば以下の通りとなる。

重要文化財

建築物、土木構造物及びその他の工作物のうち、次の各号の一に該当し、かつ、各時代又は類型の典型となるもの

- (一) 意匠的に優秀なもの
- (二) 技術的に優秀なもの
- (三) 歴史的価値の高いもの
- (四) 学術的価値の高いもの
- (五) 流派的又は地方的特色において顕著なもの

国宝

重要文化財のうち極めて優秀で、かつ、文化史的意義の特に深いもの（昭和二十六年文化財保護委員会告示第二号（国宝及び重要文化財指定基準並びに特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準）建造物の部 による）

この五つの項目は、むしろそれぞれが独立した別個のものではなく、相互に関連する。秀逸な意匠を実現する上では、相応の技術が必要であろうし、それが技術的な系統を背景とするならば流派、地域的な広がりを持つならば地方的特色ということになるのだろう。この3点の評価は、バラックのような建物にも理念的な美を見いだして評価する近代主義以降の建築美の価値観とは異なっていて、優秀な意匠の実現の前提として、良質な材料とその材料を使用することが許容さ

れる高い技術、なにより費用が確保されなければならない。

この場合の費用は、前近代においては、社会的な権力に基づく実現性に置き換えられる。弘法は筆を選ぶわけである。

また歴史的な価値は、そのまま歴史学への貢献という意味で学術価値も高くなると考えられるから、この二つも密接な関係を持つ。同じ意匠、同じ技術のものであれば、当然のことながら初源となるもの、系統的に見れば早い段階、すなわち古いものが価値を持つことになる。同時代的に見れば新規性と置き換えることができるだろう。遅れて来たものは損をすることになる。むしろ歴史は繰り返すといわれることもあるが、少なくとも生活の器として社会の変化に追従する建築においては、より良いものへというある種の発達史観が評価の前提となっている。歴史主義的（あるいは懐古主義的）な試みが必ずしも定着しないことは、19世紀のリバイバリズムや20世紀のポストモダニズムが例証しているだろう。

本稿で取り上げる建物は、美濃加茂市伊深町に現存する旧伊深村役場である。後述のようにまず役場が昭和11年(1936)に完成し、同18年に議場棟が増築された。国家を表象する様式をめぐる議論は漂流し、時代は流れて結果として無国籍様式となった国会議事堂（帝国議会議事堂）の完成は、役場と同じ昭和11年であった。「大東亜建設記念造営計画」(昭和17年)、「在バンコック日本文化会館」(昭和18年)、丹下健三による神明造りや寝殿造りの翻案がコンペを勝ち抜いたその時代に議場棟が竣工する。

与えられた条件を解いてコンペを勝ち抜いた渡辺仁の設

計によって実現した建物よりも、コンペの要綱を逸脱した前川國男の落選案のほうが注目されることの多い東京帝室博物館のコンペが実施されたのが昭和6年である。建築の設計を生業とする学士たちの関心はすでに「西洋の様式」ではなく、新たな「建築」の創造に躍起となっていた時代に、そのような喧噪からは距離を置いた岐阜県美濃地方の山間、当時の日本全国でみれば、ごくごく一般的ともいえる農村であった伊深村で村役場が建てられた。現代的な感覚で表現するならば「カワイイ」規模と意匠であるが、村の中心施設として建てられた建物である。建物の文化財的見地からの報告は別途報告される予定であるので¹⁾、以下本稿では、時代に覇を唱えるわけでもないこの建物に示される意匠、技術、歴史、地方性の一端を読み解くことで、旧伊深村役場をめぐる建築史的な考察を行うこととしたい。

2. 沿革

伊深は、奈良時代から存在が記される集落である。美濃加茂市域の北方は、岩がちな山並みからいくつかの水系が流れ出し、谷筋にまとまりある平坦地を造り出している。そのような平地のひとつ、奇岩が山肌に顔をのぞかせる山筋の南裾

に沿って、東西に長く伊深の集落は展開している。近世は旗本佐藤氏の知行地として陣屋・代官所が置かれた。さほど大きな規模とはいえない伊深村は、明治17年(1884)に隣接する加治田村、夕田村と連合村となり、明治21の町村制の施行により翌22年に単独で伊深村となった。そして昭和29年に太田町・古井町・山之上村・蜂屋村・加茂野村・下米田村などと合併し、美濃加茂市域の一部となっている²⁾。

伊深、富田、加治田の三ヵ村合同の戸長役場が置かれたのは加治田村であり、伊深村で初めて役場が設置されたのは明治24(1891)年である。伊深東南方の関也の空家が購入されたという³⁾。その後、明治44年(1911)10月に集落の骨格をなす道路に正面を向ける現在の位置に前身の役場が建設されたとされる。現段階では資料もなく、この時の庁舎の建築的な実態は不明である。近世の伊深では、旧役場東の道路を境として東を町分、西を上切分に分け、それぞれに庄屋が置かれたという。また旧役場敷地西隣の現農業協同組合事務所的位置に高札場があったとされる。旧役場周辺は近世からの村の中心であったことがわかる(図1)。

現存する旧伊深村役場の建物は、昭和10年頃の建造とされてきたものである。玄関を突出させた役場棟(仮称)と、



図1 旧伊深村役場位置図

東側にセットバックして建つ2階建ての議場棟（仮称）からなる（写真1）。伊深村役場は、昭和29年の合併以後は伊深支所、昭和44年からは連絡所となり、道路を挟んで旧役場の南側に現在の連絡所ができた昭和56年以後は伊深自治会館として集会や「伊深親子文庫」をはじめとする住民のサークル活動の場として利用されてきた。ただし耐震上の問題が指摘されるなか平成26年からは倉庫とされている。議場棟は戦後、1階は土地改良事業者や青年団が使用し、2階が議場に使用されていたという。現状は自治会などの倉庫に使用されている。主屋の東隣、倉庫南側には、行政文書などを収蔵していた土蔵（物置）が建っていたが近年取り壊されており、現在は基礎の石垣が残る。この土蔵は、役場棟側となる西を正面とする間口2間、奥行き2間の規模で、西面に半間の出で下屋庇が取り付けいていたらしい⁴⁾。後出の昭和17年以前の古写真に、下屋と土蔵の一部が写っている。

3. 現存建物の建造過程

建造年代が明らかではなかった旧役場は、現地調査では棟札や墨書など建造年代や工事関係者を示す資料が確認できなかった。しかし前述した土蔵の取り壊しを契機としてみのかも文化の森に収蔵、整理された行政文書「旧伊深村役場文書」のなかに以下2点の文書が見つかり⁵⁾、建設年代が推測されることになった。これら文書をもとに現存建物の建造年を整理する。

A「昭和六年拾壹月起 役場新築会計簿 加茂郡伊深町役場」（資料番号 Y2645, 以下「新築会計簿」）

B「昭和十七年度 役場増築工事会計」（資料番号 Y2647, 以下「増築会計」）

「新築会計簿」、「増築会計」、いずれも月日・摘要・受高（受入）・払高（支払高）の順で書き上げた会計簿で、続いて摘要ごとの支払命令書が添付される。摘要は支払いであれば項目と支払先を記したもので、支払命令書も内訳は工事の



写真1 正面外観 役場棟（左）議場棟（右）議場棟手前が旧土蔵基礎

規模や内容の詳細を記すものではないため、建築の詳細を記述から知ることはできないが、建築仕様や関わった人間、職種などの概要が時系列でわかる。

1) 役場棟の建設

「新築会計簿」は、工事費と雑費に分けて費用が計上される。年代、工事内容から見て現存庁舎に関する文書とみてよい。題目に「昭和六年拾壹月起」とあり、工事費・雑費ともに3月16日から始まり、各種工費の支払は5月31日、会計簿末尾の年号が昭和11年であり、添付される支払命令書の年月日は昭和11年3月に集中している。工事の進捗に合わせて一連で記された支払い月日によれば、末尾が昭和11年5月21日、遡る最初が前年3月16日である。会計簿は昭和6年に起こされたが、工事は昭和10年になって実施されたことがわかる。着工延引の理由はわからない。

会計簿で工期を整理すれば、請負金の内渡しは3月16日で、同日に雑費として「大工連へ祝儀」が計上されているから、この頃の着工とみてよい。また翌11年3月23日に餅などに関する支払いが計上されているから、この頃に竣工したと考えてよいだろう。つまり工事は昭和10年3月着工、翌年3月竣工、1年で終わっていることになる。ただし「倉庫上塗料」が5月26日に計上されているから、前述、現在に取り壊されている土蔵（倉庫）の上塗りなど一部の工事残はあったことがわかる。

この新築工事の関係者は、摘要と支払命令書からある程度把握できる。煩雑になるので、以下では主たる工種の人名を列挙しておく。

請負：丹羽利蔵

木工事：木下崑助

大工連：服田虎一

左官：福田九市

石工：遠山金七

11年6月22日までの工事支払の累計は2,201円で、うち請負の丹羽利蔵への支払が1,232円余である。一方で木工事や左官、石工などの請負支払金も別途計上されており、材料

費も適宜支出されている。一式請負ではなく直営に近い分離発注であったらしい。また雑費として障子張り日当・モール・カーテン・金庫据付けなどが計上されており、現在は不明である当初の内装の一端がわかる。つまり部屋としては和室と洋室からなっていたことになる。後述する現状に基づく聞き取りと整合する。

2) 議場棟の建設

「増築会計」は、工事費と雑費を別けることなく合わせて費用が計上される。年代的に、聞き取りで確認される現存議場棟に関する文書とみてよい。上棟式雑費が昭和17年9月1日に計上されるが、先立つ7月27日に庭樹木の移植、8月23日に「基礎工事賃」、同26日に「基礎人夫賃」、翌9月5日に「基礎埋立工事料」が計上されており、基礎工事は8月に始まり概ね月末には終了していたことが分かる。翌18年9月末に大方の支払が終わっており、この頃に竣工したと考えてよいだろう。つまり工事は昭和17年8月着工、翌年9月頃竣工となる。ただし「左官慰労会費」が10月28日に計上されているから、上塗りなどの工事残はあったと考えられる。なお請負形式の相違もあるかも知れないが、新築時に確認できない「左官慰労会」は計3回開催されている。後述するように議場棟は、窓開口があるものの軒周りの現況に明らかなように土蔵のような形式である。あるいは左官工事の占める割合の大きさを慰労会の開催は示しているものかもしれない。

工事関係者において新築時と異なるのは、請負に丹羽利蔵の名がない点である。新築時に木工事を担当したと考えられる木下崑助が請負を担当しており、総計1,494円余が木下に支払われている。聞き取りによれば、役場の建造には現存する木下製材所（富加町に所在）が材料を担当したとのことであった。詳細な追跡は行っていないが、以上資料に見られる「木下崑助」がその人物であろう。「支払命令書」によれば、以外の工事関係者も概ね地元である伊深、もしくは関など近隣の町村の人間であったことがわかる。

3. 建物の現況

1) 役場棟

木造、平屋建て、平入。寄棟造、棧瓦葺、左右翼部分南面は切妻屋根。

南面中央に切妻屋根車寄せ玄関付属、西面に便所棟付属。

昭和 11 年 3 月竣工（「新築会計簿」）

外観・規模・構造

規模は間口 7 間、奥行き 5 間、寄棟造、平屋建てで、土台上端から棟木下端までの高さは 6.6 メートルほどである。矩形平面に合わせて大屋根の基本は寄棟であるが、棟をコの字に巡らせて正面側両端で三角の破風を見せる。破風の間口は、平面の間仕切り位置に合わせて、東側では間口 2 間半（4.7 m）、西側では間口 2 間（3.8m）と異なっているため、その分、東西の妻の頂点の高さも相違していることになるが、一見するとその差を感じない。このような屋根形状を採用することで、中央に突出させる車寄せ玄関と合わせて、西洋の古典建築と共通する左右の対称性の強い正面外観としている。平面と整合させた巧みな処理といえる。

屋根は寄棟造、棧瓦葺で、屋根飾りにはフィニアルなど洋風な装飾を用いず、大棟には扇の紋が入った鬼瓦がのる。軒の出は 1 尺 5 寸ほどで、軒裏は水平に小幅板を張り、鼻隠しに板を打つ。車寄せの屋根は切妻造の起り屋根とし「伊深」という文字を彫り出した鬼瓦がのる。

外壁は西洋下見板張り、内法以上の小壁は土壁漆喰仕上げ、左右翼部分の妻壁は縦板張りとするが、下端を鋸刃状にして意匠を凝らしている（写真 2）。開口部は、南正面では切妻破風に合わせた縦長のポツ窓とする。車寄せ玄関の柱は上半部を丸柱、足元を八角形とする形状で、西洋建築における古典的な円柱の意匠の影響が指摘できる（写真 3）。このように意匠の基調は洋風木造建築に典拠したといえる。一方で車寄せは切妻起り屋根としていて、柱頭には下面を直線的な形状とする面取りの舟肘木をいれて桁を支え、柱を繋いで長押を回す和風の構成であり（写真 4）、車寄せ玄関は和洋折衷の意匠を採用する点が特徴といえる。

正面と対照的なのが北背面の立面構成である（写真 5）。

開口部は中央間および東間では 2 間半を二つ割り、西間では 2 間巾で大きく開口を取り、引き違い窓をたて込む。執務室の採光を目的としたであろう構成は、昭和初期の近代的な開口部の志向を示している。なお、年代は不明だが外観を撮影した古写真が残されており、外部は創建当時の姿をよく残していることがわかる。外部小壁は濃色で縁取っており、現状よりは華やかな色づかいであったらしい。

小屋組は（写真 6, 7）、径 200 mm ほどの皮を剥いだ松材を二重梁として使用し、束に枳差しとして鼻栓でとめる。梁間 5 間を 8 等分して束を立てて母屋桁を配る。母屋桁は角材に近い材で、垂木を配し木舞野地を張る。このように小屋組は伝統的な和小屋を採用する。屋根勾配は実測値で 30°、5 寸 8 分勾配である。この屋根勾配は小屋組とは対照的ともいえ、相応の理由が想定できるが詳細は後稿とし、現段階ではその相違を指摘するにとどめたい。なお床下は十五畳間と書庫の間の土台など一部に古い材料の転用が確認できる。

平面・内観

現状の平面は玄関・廊下、和室や洋室に設えられた 5 室からなる当初の部分、そして西側に新設されたトイレ・物置からなる。東側には昭和 18 年増築の議場棟が取り付く。当初部分の平面は、桁行きで東から 2 間半、2 間半、2 間で分割した構成である。梁間南半の 2 間分で玄関および廊下を設け、現状では東側を台所（写真 8）、西側を児童図書閲覧スペースとしている。梁間北半 3 間分では、中央の和室十五畳（写真 9）を中心とし、西側の和室十二畳（写真 10）とが一体となった 2 室続きの和室広間で、台所北側となる東側が書庫とされている。

内装は公民館とするにあたって大きな改変が加えられており、旧状はほぼ残らないが、戦後の伊深村時代の旧状については、ヒアリングと痕跡調査からある程度復原できる。中央十五畳間部分は板の間で村長室として使用され、合計二十畳ほどの広さとなる東側の台所と書庫部分は一室の事務室で、収入役や助役など 10 名程の職員が勤務し、金庫の保管

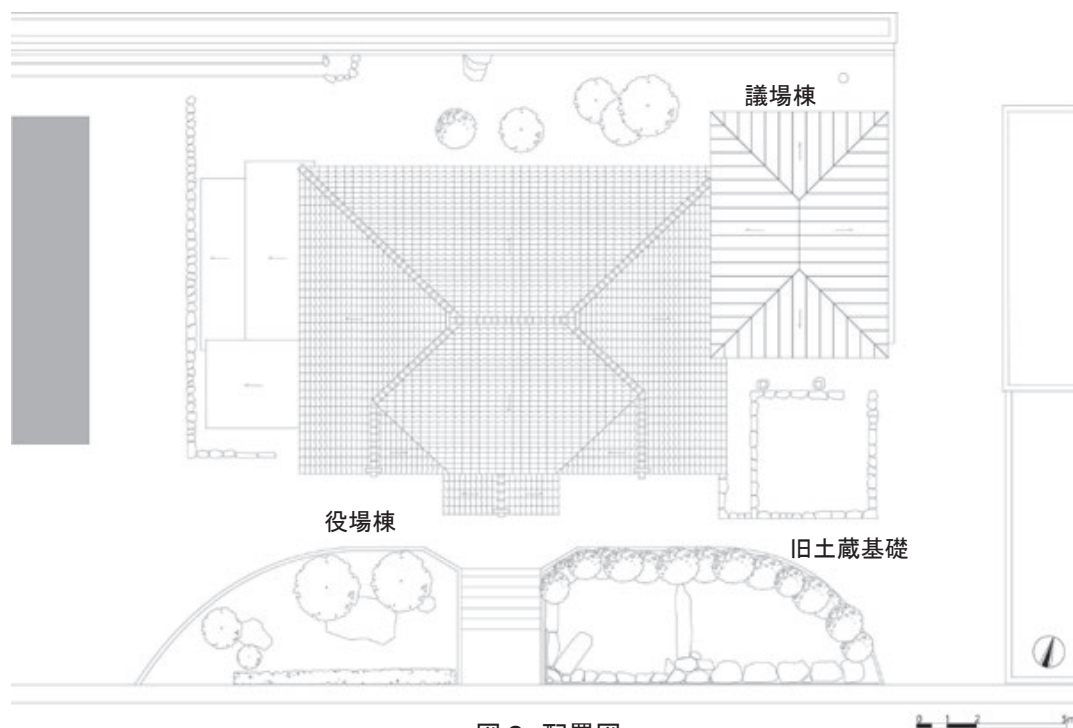


図2 配置図

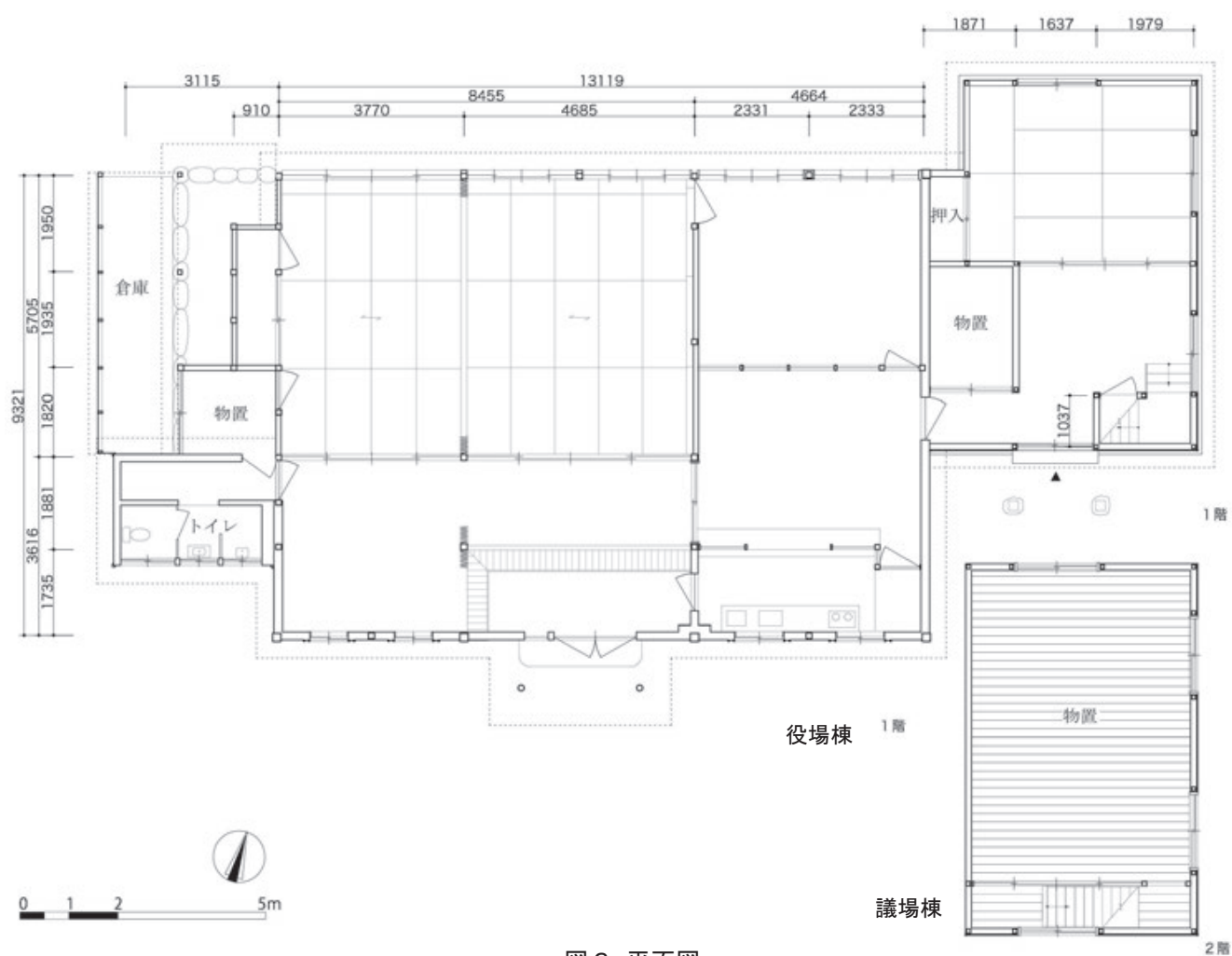


図3 平面図



写真2 正面左翼部分



写真3 車寄柱



写真4 車寄意匠



図4 役場棟 立面図

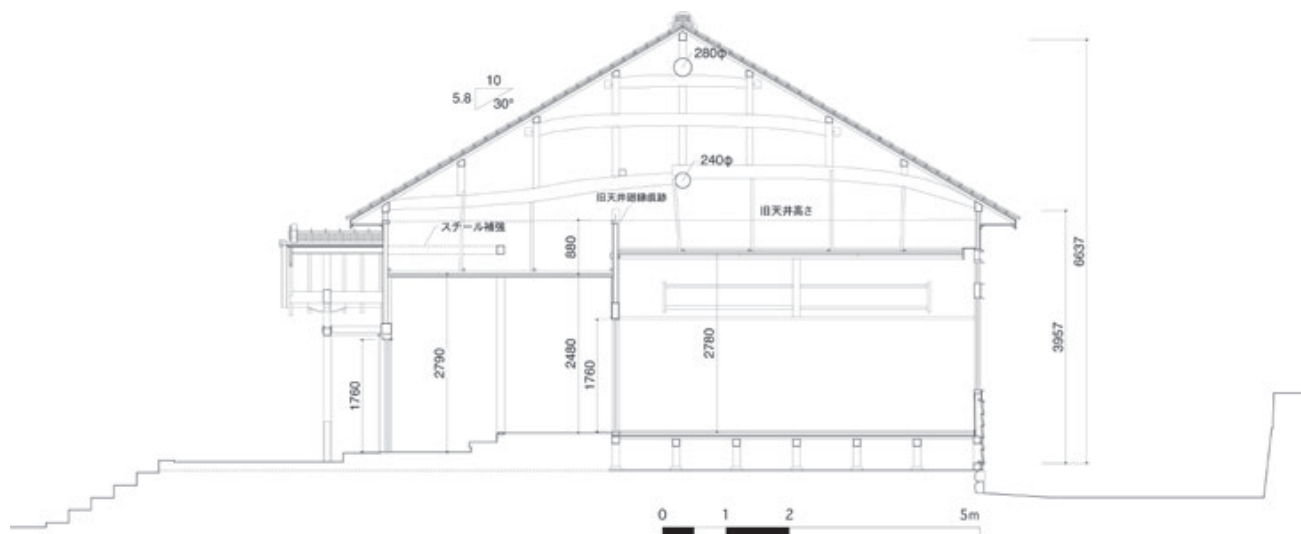


図5 役場棟 断面図



写真5 外観北面



写真9 中央十五畳間 東見る



写真6 主屋小屋組 見上げ



写真10 西側和室十二畳 西見る



写真7 主屋小屋組 軒を見る



写真11 小屋裏 壁痕跡



写真8 台所



写真12 小屋裏 旧廻縁痕跡

場所にもなっていたという。聞き取りによれば廊下側の建具がガラス戸であったこと、北側の柱に残る欄間回転窓の軸の痕跡、前述「新築会計簿」にモール・カーテンの購入額が計上されている点からみて、村長室や事務室の室内意匠は洋室に相当するものであったことになる。

特徴的なのが西側の十二畳間部分である。旧状は畳敷きで囲炉裏が切られ、職員や住民が集まり談笑などした場所であったという。前述の雑費から考えれば、建設当初から和室と洋室の存在が推測され、遺構の現況をみても聞き取りによる戦後の状況は、建設当初と異ならないと考えられるので、当初から町長室以東が洋室、この十二畳部分が和室と想定してよい。行政的な課題などは議会ではなく、むしろこの囲炉裏端で解決されていたという。庁舎における舗設のあり方として、昭和11年の段階でこの形式が一般的であったかは、わからない。むしろ今日的な感覚からみれば公民館的、あるいは前近代的な感覚からみれば会所的な舗設といえる。しかしお互いの顔が見える規模の地域コミュニティーに対応した場のあり方として、このような囲炉裏端こそが有効であったということであろう。

この十二畳間の北面開口部は大きく改変があり、現在は外部となっている北西部には、水回りを設けた痕跡が地面に残る。おそらくこの和室に接続して勝手土間などの部屋が下屋状に取り付いていたのであろう。また南側の現状図書閲覧スペース部分には謄写版が置かれ、現在は開放になっている玄関及び廊下部分とは間仕切られていたという。この聞き取りに対応するように、小屋裏からみえる柱の小屋裏部分に間仕切りの土壁の痕が確認でき（写真11）、玄関と廊下も間仕切られていたことが遺構の現況でわかる。

旧状が現況と大きく異なるのが天井高さである。中央十五畳間と西十二畳間の現在の天井高は2780mm（9尺2寸）であるが、小屋裏の柱や東には現在の位置よりも高い位置に廻縁痕跡が明瞭に確認でき、旧天井高は3310mm（10尺9寸）であったことがわかる（写真12）。この廻縁痕跡は現状5室および玄関・廊下にも確認でき、全体が同じ天井高さと

なる。天井高がかなり高いが、洋室の意匠に対応したものであろう。

この役場棟の平面計画で注目されるのが柱間寸法である。当初部分のうち、桁行方向をみれば、東西3室の真々寸法は同様な傾向を示しており、概ね柱真々一間を6尺2寸とする計画であると判断される。梁間方向は、実測値で南側2間は3616mm（1間＝6尺で2間）、北側3間は5705mm（1間＝6尺3寸で3間）となる。内装の改変から明確な寸法体系が見だしにくいだが、総間では桁行と同様6尺2寸を基準にして、客溜まりとして土間とされたとも考えられる南半部を1間6尺の真々で割付けた可能性が考えられる。濃尾地方の民家や町屋で採用される畳敷きに準じた中京間の影響が考えられる柱間寸法の設定である。

伊深地区における他の調査事例の資料はないが、筆者が調査した蜂屋村や下米田の近代農村住居⁶⁾、あるいは幕末から大正にかけての中山道太田宿の町家⁷⁾、いずれの事例も中京間で計画されていることが明瞭である。一方で、明治43年建造の久々利小学校校舎（可児市）は、東京帝国大学卒の遠藤於菟が設計に関与したことが確認できる事例であるが、6尺を1間とする真々制（いわゆる田舎間に相当する）を採用する⁸⁾。洋室・土足を採用する場合、6尺真々制で設計上の不都合はない。あえて中京間内法制ともみなされるこの役場棟の寸法体系は、外観における洋風の採用とは対照的に、在来の伝統的な技術に根ざすものとみることができ、設計者の出自を示唆する点として注目される。

2) 議場棟

木造、2階建。寄棟造、鉄板葺。

昭和18年9月竣工（「増築会計」）

主屋東側に隣接する議場棟は寄棟造の総2階建であり、梁間2間半、桁行4間の建物である（写真13）。現在は倉庫として用いられている。外壁は、南および東面にはカラー鉄板が張られているが、北面はモルタルリシンかき落としでウマ目地の目地切り仕上げ、腰がモルタル洗い出し目地切りにな

っている（写真 14）。トタンは後補であり、当初は三面とも北面と同様な仕上げであろう。旧状が残る北面では、軒裏はアールを付けて塗り上げる土蔵状の仕上げである。前述「増築会計」にみる左官仕事の実体が、遺構に示されているとみることができる。

外観の意匠に着目すると、洋風、あるいは和洋折衷の住宅をはじめとして建造年当時において一般的であった仕上げを用いるとみることができる一方で、上述軒裏の仕上げなどで役場棟とは異なる和風の要素を持つ点が特徴的である。古典的な洋風の構成を基調とする役場棟とは対照的に、和洋あるいは近世と近代が渾然となったかのような要素の組み合わせである。このような外観の意匠の選択が、どのような方針、あるいは設計者の意志でなされたかはわからないが、旧状ではこの議場棟の前には土蔵が建っており、外観として認識されるのは小学校のアプローチから望見される東側のみであるから、正面を公の顔として見せる役場棟とは外観の持つ意味が異なるのは間違いない。

内部では、1 階は南側の板間と北側の十畳間に分かれるが、当初は一室であり、戦後になって青年団が使用するために畳が敷かれたそうである。議場とされた 2 階は、階段を含んで二十畳の広さがある（写真 15）。現在は階段北側で前室状に間仕切りが入っているが後補である。1 階、2 階ともに倉庫として用いられている

4. 意匠と技法からみた旧伊深村役場の評価

今回の調査により、主屋内部は改修が行われているものの、聞き取りと資料によって創建に近い時代での使用状況が明らかになった。古写真（写真 16）と比較すると、外部は創建当時の姿をよく残していることが明らかで、旧伊深村役場は、美濃加茂市域において建設当初の位置を保って主体部が良好に現存する唯一の戦前の村役場の庁舎であるということになる。

建築史的にみた場合も、注目すべきは当初の構成を良く残す役場棟外観の意匠である。敷地前面に引きをとって配置さ



写真 13 議場棟 東南より見る



写真 14 議場棟外観北面



写真 15 議場棟 2 階

れた役場棟は、矩形平面ながら屋根の棟をコの字状にして三角の妻壁を正面にみせる。左右の対称性と正面性を強調した構成である。明治時代の建築の造形について言及した鈴木博之氏は、明治時代の建築が中央に塔を上げる左右対称形と角に塔を上げる形の 2 つのタイプに大別されるとする。そして、

余裕のある敷地を前提とした前者が、最も単純な古典主義建築の構成手法であり、かつ明治初期の公共的建築に好んで採用された最も明快な特権的表現であったとし、同様に角地を前提とした後者は民間商業施設の都市的な表現であり、洋風建築が都市全体に広がり始めた明治後期にはその意味を失い、徐々にみられなくなるとした⁹⁾。しかしながら旧伊深村役場の存在は、昭和10年の段階においても、この地方で依然として、洋風の構成を基調として左右対称を強く意識した古典的な立面構成が採用されていたという事実を示していることになる。

ただし、一見すると後進的とも理解されそうなこの構成が、この地域での画一的な洋風意匠の理解を示したものではないことには注意しておく必要がある。現在もこの役場敷地の北側に広い敷地を占めている伊深小学校は¹⁰⁾、役場建設時点で、横連装窓で開口を大きくとり、アメリカ下見板張りという近代小学校建築の典型といえる意匠を採用していた(写真17)。また役場と同様な唐草様の紋を入れる鬼瓦が載る旧伊深農協事務所も¹¹⁾、ポツ窓ながら引き違い窓としていて、より時代の傾向を示した意匠であった(写真18)。現美濃加茂市域に視野を広げても、旧伊深村役場建設を遡る早い時代から、ある種機能主義的ともいえる意匠が選択された建物の事例は多い¹²⁾。旧伊深村役場棟における華やかで古典的な正面外観意匠の選択には、時代遅れ、あるいは古風ともいえる後進性よりは、地域の中心としての役場のあるべき形式への明確な意志を看取るべきといえるだろう。

このような意匠を選択した設計の主体者は、工事にあたった大工であったのか、他に存在したのか、現段階では特定できたわけではない。しかしながら平面にみる寸法体系は、前述の通りこの地域の技術者の関与をしめすものと判断できる。そして役場棟の外観は、いわゆる見よう見まねで作ったレベルのものではなく、当時流布していた技術書などを踏まえたものと判断できる。であるならば、史料にその名を記す請負の丹羽利蔵、あるいは木工事担当の木下崑助の周辺で創り出されたと考えるのが妥当であろう。この地域の技術者に



写真16 外観古写真（昭和17年以前）



写真17 伊深小学校古写真（大正13年時点）



写真18 伊深農協事務所（昭和33年時点）

おける、戦前段階での意匠的な理解の実態を示すものとして技術史的側面から見ても興味深い存在といえる。

以上、現状の整理から指摘できる旧伊深村役場の特徴と価値を建築史的な観点から整理するならば、以下の通りとなる。

美濃加茂市域で現存する唯一の戦前の町村庁舎であり、主体部は良く残っており、洋風を基調に和風の意匠や技法を採り入れた、小規模ながら昭和戦前における地方公共建築の好

例であり、寸法取りなどに濃尾地域の特徴を示す点でも学術的価値が高い。

伊深は、近世以来、陣屋に付随して形成されてきた集落で、茅葺きの建物も残って里集落としての趣を残す。このような魅力の発信は、今後の伊深のまちづくりに重要と考えられるが、旧伊深村役場は伊深のまちの導入部に立地し、外観のデザインと歴史的な価値からみて、伊深の近代を物語る地域の遺産として、歴史的、景観的に重要な存在といえる。地域コミュニティの形成・まち散策の拠点施設としてのアピール度を持った建物であると位置づけられる。今後、伊深のまちづくりの計画の中に積極的に位置づけられてよい。

付記・謝辞

本稿は、科学研究費 基盤研究（A）課題番号 25249083（代表 藤井恵介）、科学研究費 基盤研究（C）課題番号 25420675（代表 溝口正人）、受託研究（芸受 26-16）に基づく研究成果の一部である。資料収集にあたっては、美濃加茂市教育委員会文化課、現地調査では伊深地区の住民の方々に多大な協力をたまわった。記して謝意を表す。

註 記

- 1) 「美濃加茂市民ミュージアム 紀要 第14集」2015. 3
- 2) 伊深の沿革については『美濃加茂市史 通史編』、美濃加茂市 1980、『市民のための美濃加茂の歴史』、美濃加茂市教育委員会 1995 による。
- 3) 現地聞き取りによる。
- 4) 平成 16 年の日本昭和村建設にかかる「民家等及び古木の応募用紙」添付図による。
- 5) 美濃加茂市文化財調査集録第 2 集、美濃加茂市教育委員会文化課 1996. 3、資料番号も同集による。
- 6) 溝口正人・野々垣篤「美濃加茂市近代農村住宅の事例的考察」、美濃加茂市文化財調査集録第 3 集、美濃加茂市教育委員会文化課 1997. 3、pp17-27
- 7) 小寺武久・溝口正人他『旧中山道太田宿調査報告書Ⅰ（民

家）』、美濃加茂市教育委員会文化課 1992. 3

- 8) 溝口正人『可児歌舞伎プログラム 地芝居および関連施設の現況調査報告書』（財）可児市文化芸術振興財団 2003. 3
- 9) 鈴木博之「総論 図面で見える都市建築の明治」（『図面で見える都市建築の明治』1990、pp7-13
- 10) 美濃加茂写真集編集委員会編『写真集 明治大正昭和 美濃加茂』創文出版 1986
- 11) 『十周年記念 加茂郡市農業協同組合誌』1958. 3。建物は戦前もしくは戦直後に遡るものであろう。
- 12) 註 10) 参照。市域における近代建築の事例が多く掲載されている。